第4回日本伝道会議・沖縄宣言

「21世紀の日本を担う教会の伝道－和解の福音を共に生きる－」

第二章　和解の福音を共に生きる―この時に

私たちは「この時に」生きています。したがって、「和解の福音」を信じ、宣べ伝え、共に生きるためには、「この時」を正しく認識することが必要です。

1. 歴史を心に刻む者として

私たちは、二十世紀が終わろうとする「この時に」生きています。二十世紀は二度の世界大戦、植民地紛争、人種間の対立、イデオロギーによる東西の冷戦など、対立と戦争の世紀でした。特にこの十年間は、キリスト教を含む宗教に関わる民族間紛争が激化し、多くの難民が生まれました。私たちは創造主である神に背き、神との交わりを失った結果、自己中心になり、自らの利益のために互いに争うようになりました。このような現実を目の前にするとき、「和解の福音」の意義を実感します。

この会議が沖縄で開かれたことによって、私たちは沖縄の歴史に触れ、和解の福音を深く理解するようになりました。沖縄は薩摩藩の侵略に始まり、明治政府の「琉球処分」によって天皇制の帝国日本に併合されました。太平洋戦争においては日本全土の防波堤とされ、戦後の講和条約締結後も信託統治領として米軍の軍政下に置かれてきました。一九七二年、日本国に施政権が返還されたものの、今なお米軍基地の七五％が沖縄に集中しています。そのため沖縄の人々の生活は大きく制約され、さまざまな苦難を負わされています。しかし、私たちの多くの者はこの現実を知ろうとはせず、無関心であったことを告白し悔い改めます。

このことは歴史認識の欠如に起因するだけではありません。戦争や紛争を生み出した罪が、今の私たちの無知や無関心の背後にも潜んでいます。かつて帝国日本をアジア侵略に駆り立てた罪が、今、形を変えて私たちの多くの者の中に、侵略と戦争の責任を認めない姿勢として現れています。罪はいつも他者の苦悩に共感する力を奪い取り、相互の関係を破壊します。

私たちは、沖縄をはじめ、日本各地にある諸問題やアジアの問題と向き合っていかなければなりません。また、より日常的な家庭、教会、地域社会という場にある、無関心や対立の現実にも目を向ける必要があります。私たちは、身近な問題においても、利己的な繁栄を求め、他者との関わりを無視してこなかったか反省が求められます。

2. 歴史を形成する者として

私たちはただ過去に学ぶだけではなく、未来に向かって歴史を形成する者としての使命が与えられています。

私たちが果たすべき第一の使命は和解の福音を宣べ伝えることです。戦争や紛争、敵意と憎悪、種々の悪と犯罪はみな、神に敵対した人間の罪が生み出したものです。したがって、私たちは神に背き、神と敵対する人間に対して、「神の和解を受け入れなさい」と勧めます。福音の宣教だけが、新しい世紀に平和をもたらすことができるものであると私たちは確信します。

神によって赦された者だけが、赦された者として互いに赦し合うことが可能になります。平和をつくる私たちは、歴史において神のみこころの実現を目指します。もちろん、平和は、私たちの努力だけによって達成できるものではありません。聖書は、神のみこころの最終的な成就である終末に向かって、この世界の悪は増大していくと教えています。とはいえ、悪を放置してよいはずはなく、終末において完成する救いを先取りし、経験した者として、私たちは、神の義と愛を実現するために労していきます。その労苦こそ、神による救いのすばらしさを証しするものであり、主にあって空しく終わることはないと確信します。

この世界に対して和解の福音を宣べ伝え、この世界にあって和解の福音を生きるためには、私たちが「キリストのからだ」として一つとなる必要があります。過去における無関心、利己主義、ねたみ、敵対心を悔い改め、互いに赦し合い、赦すことによって互いを受け入れます。

私たちは、このキリストにある赦しと交わりこそが、歴史を形成する営みの土台となると確信します。

このように私たちは教会の一体性を再確認し、この世界に神のみこころを実現するために、ひとりひとり遣わされた所で祈り、労します。（つづく）

最終日、宣言文起草委員らが交代で「沖縄宣言」を朗読し会衆は起立して採択に賛成を表明、最後に舟喜信・会長が祈りの言葉を読み上げ、全会衆が唱和した

ろんせつ ＜論説＞

論説委員　片岡 伸光

沖縄から世界へ――21世紀へ向けて

六月末に沖縄で開かれた、第四回日本伝道会議は、非常に円滑に進められた会議であった。関係者の周到な準備と運営の労に感謝している。

今回の会議において、戦場とされた沖縄で、戦火をくぐりキリストに出会った、国吉守牧師、渡眞利文三牧師、金城重明牧師の第一証言にふれることができたことは、とりわけ意義深い事であったと思う。戦争の被害者であった彼らが、自らの内にある罪を認め、キリスト者となり、戦争をめぐる忘れてしまいたいような経験を、勇気をもって今も語り続けている姿にうたれた。第一証言者の言葉は、穏やかに語られていても、それは単なる情報ではなく、意味やいのちがこめられている。キリストの教会のいのちは、この証言の力によって継続されてきたのである。

また、証言を聞いた者は、それに対する真実な応答が求められるが、会議を終えてそこで得たものを、どのように継続・展開していくかが私たちに問われているように思う。沖縄は、戦後も基地の問題を背負い、戦争が過去形となっていない。キリストの体に連なるものとして、共感と連帯が求められるのである。そのためには今回の出会いを、一度限りで終わらせず、各教会単位の交流や個人的な交わりを続けることが必要である。

ディアスポラの時代

今回、第九シンポジウム「世界の教会とともに―宣教の聖書的基盤―」を設けて世界宣教を明確に位置づけ、その中に第三十二分科会「ディアスポラの時代」を置いたことは、評価に値することである。海外日本人伝道の取り組みは、今始まったことではないが、世界各地で海外在住の日本人（語）伝道に取り組む人々が一堂に会して話し合えたことは、やはり第一証言者としての力強さを覚える励ましに満ちたものであった。長年海外教会に奉仕した先輩牧師は、海外において自国語で福音を聞くことはペンテコステ礼拝の結果を見るように思うと語った。それぞれの事情で海外に散らされている邦人が、聖霊の導きを得て自国語で語る福音を聞くことは神の働きであると。確かに、海外にいるときに同胞は福音に対して心を開きやすいことが、あらためて確認された。

帰国者フォローへの連携

同分科会の後半では、帰国者が教会に定着することの難しさと対策について話し合われた。取り組むべきこととしては、海外教会がその人はやがて日本に帰り日本の教会に戻ることを十分に意識した教育訓練をすること、日本の教会が帰国者を受け入れられるように整えられること、帰国者をフォローアップする交わりを起こすことなど、すでに取り組まれていることの紹介も含めて話された。そして、まとめとして、日本の教会と海外日本人教会との深い連携とネットワークづくりの必要が語られたのである。帰国者問題の多くは、日本の各個教会と海外日本語教会が互いの働きを知らないことから来ている。今後の課題として、すくなくとも情報交換の拠点となる機関が必要であり、今後インターネットなどの活用が期待される。また、海外日本人教会の設置されていない都市の働きを覚えて祈る必要もあわせて確認された。

今回の分科会参加者は、ほとんどが海外で働く人か、これから働こうとしている人であった。伝道会議には他にも話し合うべき多くの課題があるので、やむを得ないとは思う。しかし、海外日本人伝道および帰国者の問題は、海外日本人教会と日本の教会がともに話し合うべきことである。もっといえば、海外日本人伝道は、特別な重荷をもつ人の働きではなく、きわめてすべれて日本の教会の働きなのである。今回の伝道会議が、そのような自覚をもつことの始まりとなるなら、これにまさる収穫はないのではあるまいか。

海外日本人伝道に限らず、他のキリスト者の働きを神が自分たちに託されたことと見ることが、「和解の福音を共に生きる」ことではないか。その意味で二十一世紀はすでに始まっていると言わなければならない。

戦時下の性犯罪を女性の手で裁く

12月「女性国際戦犯法廷」へ

キリスト者全国集会を9月30日東京で

日本軍「慰安婦」制度など戦時下の性犯罪を裁く、女性の手による民間の「女性国際戦犯法廷」（VAWW－NET-Japan主催）が、今年十二月、東京で開催される。同法廷開催に先がけ、各教会でも「この問題について考えて欲しい」と、日本キリスト教協議会（NCC）女性委員会の呼びかけで「二〇〇〇年女性国際戦犯法廷へ向けたキリスト者全国集会」を九月三十日、東京で開くことが決まった。

このほど関係者らによって同「全国集会」実行委員会が発足し、実行委員長に梁霊芝氏（ヤンヨンジ）（在日大韓基督教会信徒・NCC女性委員会メンバー）を選出した。

全国集会は九月三十日午前十時三十分から午後三時三十分、会場は東京・新宿区大久保の日本福音ルーテル東京教会。テーマは「女性への暴力を断ち切るために」で、第一部はVAWW－NET-Japan代表の松井やより氏が基調講演。第二部のパネルディスカッションでは、「慰安婦」問題、沖縄の米軍基地と女性、女

世界福音伝道団 記念出版、伝道

世界福音伝道団（高橋博理事長）＝滋賀県神崎郡五個荘町＝は三月二十日、栗東キリスト教会で開いた第三十回総会で五十周年記念

『マンガ日本キリスト教史』

キリシタン時代の流れがわかる

十六世紀のキリスト教伝来に始まる、日本におけるキリスト教の歩みがマンガでわかる本『マンガ日本キリスト教史』の上巻「国籍は天にあり」が、雲の間にある虹出版から発売された。

マンガの作者は、本紙児童版「らみい」の表紙イラストなどで知られる漫画家まどかまこさん。「マンガを描くという神様からの賜物を生かして、日本のキリスト教史を描きたい」というビジョンをもったまどかさんが自ら文献を集め、昨年春に完成したマンガを同社に持ち込んだ。マンガは同じ時期に創刊された週刊新聞「み声新聞」に今年春まで約一年間、全五十回連載。連載中に読者から「当時のキリスト者の生き方がよくわかる」など良い反応があり、単行本化が決定した。

上巻では、一五四九年のフランシスコ・ザビエル来日の経緯から、スペイン、ポルトガルなどの宣教師によって日本各地に伝えられた福音の流れ、豊臣秀吉から徳川幕府の時代に入り激しくなる禁教と迫害、鎖国の完成、明治初期のキリスト教禁制の高札撤廃までを描いている。学校教育の中では深く触れられない、日本宣教の途上で起きたさまざまなエピソードや、禁教・高札撤廃に至るいきさつなども詳しく紹介され、日本のキリスト教史を、難しくなく一貫し

「戦後補償」教会の役割

ワインガートナー氏語る

DPRK（北朝鮮）人道支援国際NGO会議が、六月三十日から三日間東京で開催されたが、同会議出席のため来日した元世界教会協議会（WCC）幹事で平壌で一九九七から九九年七月まで各国非政府組織（NGO）からの食料支援物資モニターなどを務めたエリック・ワインガートナーさん夫妻を迎え七月三日、東京・新宿の日本キリスト教会館で懇談会が開かれた。

懇談会に出席した米国教会協議会アジア太平洋地域担当幹事のビクター・シュール氏は、「北朝鮮の人道的支援が限られている日本でNGO会議が開かれたことに、大きな意味がある。メディアの関心も高く、日本のNGOと政府の関係にもいろいろな可能性が広がった」と語った。

ワインガートナー氏は「南北首脳会談のリアクションがあり、周囲に大きな影響を与えている。分断はある意味で再軍備の口実だったが、今疑問符が付けられている。NGOには、平和の構築という意味で今は

世界の出来事

●上海でパラウ氏が説教

【中国】アルゼンチン生まれの大衆伝道者ルイス・パラウ氏が子どものころからの夢だった中国伝道を実現、五月に上海の三つの教会で説教した。上海基督教協議会の招待によるもの。

子ども時代パラウ氏は、母が宣教師ハドソン・テイラーについての物語を読むのに耳を傾け、中国に行くのを夢見た。中国の巨大な霊的必要とテイラーの激しい情熱に「大きな衝撃を受けた」と米レリジョン・ト